

那 須 野 巡 検 （松井先生）

10月10日～13日

松井先生御指導の巡検に参加できるのも私達が最後、そのせいか那須野巡検は雨にたたられるという恒例にもかかわらず、2日目に小雨にあっただけで、あとは好天に恵まれ幸いであった。

10日 朝6:54上野発の普通電車に乗りこむ。車窓観察開始。目に見えるもの全てを観察することのむずかしさを痛感。川口の町にある水たまりが荒川の後背湿地の特徴であること、防風林の樹種が所によって違うことなど、先生に御注意いただき初めて気付いたりした。武蔵野台地——荒川沖積地——大宮台地…と、土地の起伏によって農作物、集落形態などが左右されている。

午後は中山から平林にかけてを調べた。坂で比高を調べ地形面を推定する。泉（この地方では出釜という）らしきものを発見。水の湧き出る泉のイメージとは違っていた。巡検でなければそれと気付かなかっただろう。蛇尾川は川幅に比べて水量が乏しかった。礫は淘汰が悪い。扇状地河川の特徴である。中山から平林に続く道で迷い、前に歩いた道に戻ってしまった。別の道を通って行く。田の中に揚水ポンプを見つける。小さな小屋で予想外だった。この付近は湧泉帯以南なので、水利は良いが補充のためにあるのだそうだ。平林でも比高を探る。小川（蛇尾川の支流）の侵食は下流の方が深かった。

11日 笹原から鹿畑にかけての那須野面と親園面の境（ガケ）を追跡。途中、農家と非農家の建て方の違いの実例を見る。農家は日光を多くとり入れるために南向き、非農家は道路むきに建っている。ガケの追跡は地形面が耕作によって人為的に改変されているため困難だった。水田の面の高さがわずかずつ違っているために、どの面までで区切るかがよくわからない。地図の土地利用で桑畑となっている所（現在は水田化している）で境になるらしい。農家の庭先に高さ50cmほどの半地下式サイロを見つけた。一頭分の飼料程度のものだそうだが現在は利用されていない。

鹿畑から西にむかう。新しい用水路がある。地図でたどると分岐点はかなり北である。新造中の切り通しがある。露頭でロームと鳥の目礫層を観察。鳥の目礫層は淘汰が悪い。保水性はあまり良くないそうだ。切り通しの上は金丸原面である。

12日 ガケの追跡を黒羽街道まで続ける予定で、昨日の最終地点から調査開始。好天でまわりの山々がくっきり見える。金丸原面は完全に開田され、広い田が広がっている。コンバインを利用して穫取り、脱穀を同時にやっているのに出あった。貯水槽があった。揚水ポンプを利用している

らしいが、ポンプ小屋は見えなかった。昨日のガケの最終地点に戻り、その後、不明瞭な比高1～2mぐらいのガケを田畑の中からさがしだす作業を続ける。根気のいる仕事である。一枚の地形面図を完成させるのに、こんなに時間をかけるとは知らなかった。ちょうど収穫期なので、ハーベスター、脱穀機、もみすり機(?)などの作業が見られた。稲の干し方がはざ、棒ぐい利用と一定していないのは、開拓地のためだろうか。那須第二分水(品川堀)を見る。水田面より低く流れが早い。もっと下流に水を供給しているらしい。典型的な農村の商店(よろず屋)が時々ある。

15:00頃黒羽街道に至る。ガケの追跡が完了したことがうれしい。川上ほど比高が低くなっている。

13日 10日の最終地点のあたりから中山を通して城山まで、城山で景観を見る予定。平林の坂は親園面と低位面の境らしい。低位面の一段高いところに加温式のビニールハウスがありキュウリを収穫していた。現在は加温していないが、この収穫後、トマトの栽培に利用するそうだ。中山に抜ける那須野面は山林になっている。樹種は混合林。シイタケの栽培をしていた。先日道をまちがえた場所を確認。途中、葉トウガラシの塩漬を作っていた。佃煮にするためだそうだ。那須野はトウガラシの産地なのだそうだ。

城山の見晴し台からは、金丸原面の開田された様子がよくわかる。農家は防風林に囲まれ散村的だが、市街地は密集している。城山を降り、旧陸羽街道を歩く。現在は人通も少ないが、家並は他より立派な気がした。道が鉤型に曲っているのは敵の来襲に備えてのことだそうだ。大田原の城下町としての一面をのぞいたような気がした。

この巡検で私達は始めて、地域をていねいに調べることを習った。細かい見のがしそうなことで、微細地誌においては大切なことがあるのだ。地形面図の作成にける手間等、『君達の年令よりも長く』那須野を研究なさっている松井先生の研究態度を見せていただき、この巡検での本当に貴重な体験だったと思う。(3年 柴田裕美)

木曾谷・富山巡検 (浅海先生)

昭和47年10月18日～10月20日

10月18日

8:20東京発こだまに乗車して11:05分名古屋に着く。それから名鉄に乗り換えて、犬山